

ピュアであること：ソローにおける認識の行方

高橋, 勤
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5476>

出版情報：言語文化論究. 16, pp. 43-52, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

ピュアであること

——ソローにおける認識の行方——

高 橋 勤

1 ウォールデンの光と水

ソローに対する弔辞の結末部において、エマソンが、この年下の友人をチロルの山岳にエーデルワイスを求めた旅人と表現したことは示唆的であった。¹⁾ なぜなら、エーデルワイスは、「気高き純粋さ」(Noble Purity)を意味する花であり、エマソンはそれをソローの特質と考えていたからである。ソローの代表作 *Walden* にしても、われわれが受ける読後感のおおくは、その「純粋さ」(purity)ということではないだろうか。ウォールデンの森の情景の美しさとともに、みずみずしく透明感のあるソローの文体が、この作品の「純粋さ」の本質であろう。

たとえば、「動物の隣人たち」(“Brute Neighbors”)という章に、ヤマウズラ (partridge) の親子の描写があるが、そのヒナ鳥の目をソローは、つぎのように表現している。

The remarkably adult yet innocent expression of their open and serene eyes is very memorable. All intelligence seems reflected in them. They suggest not merely the purity of infancy, but a wisdom clarified by experience. Such an eye was not born when the bird was, but is coeval with the sky it reflects. The woods do not yield another such a gem. The traveller does not often look into such a limpid well. (W 152)²⁾

この文章の「純粋さ」は、むしろ、ヒナ鳥の目の「純粋さ」ではない。ヒナ鳥の目に関するソローの詩的感性の純粋さであり、比喩や修辞という、この文体の純粋さであることは明確だろう。ヒナ鳥の目は、「幼年期の純粋さ」ばかりではなく、「経験によって純化された知恵」をたたえ、「宝石」、「澄んだ井戸」、そして「(その目)が映し出す空」に喩られているのである。

このヤマウズラのヒナの目の描写は、興味深いことに、ウォールデン湖の「清澄さ」(purity)を描写した文体ときわめて類似していた。ソローは、ウォールデン湖について特筆すべきことは「その深さと清澄さ (purity)」(W 118)であると述べたあとで、この湖を「清らかで、深緑の井戸」(“a clear and deep green well” W 118)に喩え、「原初の水の宝石」(“a gem of first water” W 121)と言い直しているからである。さらに、ウォールデン湖は、丘の上から眺めると「空の色を映し出している」(“it reflects the color of the sky” W 119)と描かれている。ヤマウズラのヒナの目がウォールデンの空と水を映し出し

ていたのと同様に、ウォールデン湖は「大地の目」(“earth’s eye” W 125)であったわけである。いわば、ヤマウズラのヒナの目はウォールデンの縮図であり、ウォールデン湖はヤマウズラの目の *macrocosm* として描かれていた。

世界は円の連なりから成り、目はその最初の円である、と述べたのはエマソンである。³⁾ 「大地の目」であるウォールデンの湖も、またヤマウズラのヒナ鳥のつぶらな目もそれぞれに同心円を構成し、相互に反映しあうような世界像がそこには描かれていた。⁴⁾ そこには個が全体を映し出し、全体が個を映し出す世界像があり、この透明感あるいは「純粋さ」こそが、ウォールデンの世界の特質であったと言えないだろうか。

ソローがウォールデン湖を詩的な感性で描きだしたばかりではなく、その「清澄さ」(*purity*)を精神的な象徴と捉えていた。ウォールデン湖は「ひとつの象徴として、深く、明らかに (*pure*) に創られて」(W 190) おり、「ウォールデンの清らかな (*pure*) 水は、ガンジス河の聖なる水とつながっている」(W 199) と考えられた。精神的、あるいは宗教的な意味合いにおける「純粋さ」の追求を、ソローは作品『ウォールデン』において、つぎのように表現している。

Who knows what sort of life would result if we had attained to purity? If I knew so wise a man as could teach me purity I would go to seek him forthwith. “A command over our passions, and over the external senses of the body, and good acts, are declared by the Ved to be indispensable in the mind’s approximation to God.” Yet the spirit can for the time pervade and control every member and function of the body, and transmute what in form is the grossest sensuality into purity and devotion. The generative energy, which, when we are loose, dissipates and makes us unclean, when we are continent invigorates and inspires us. Chastity is the flowering of man; and what are called Genius, Heroism, Holiness, and the like, are but various fruits which succeed it. Man flows at once to God when the channel of purity is open. By turns our purity inspires and our impurity casts us down (W 147)

ソローの思想を特徴づけるものは、ピュアなものとピュアでないものを明確に区別し、「ピュアであること」をみずからの「原則」として追求した、その激しさにある。ソローの言葉を借りると、「ピュアでないものは、けっしてピュアなものと交わることはないのである。」(“The impure can neither stand nor sit with purity” W 148) ソローの思想において、ウォールデン湖が聖なる「純粋さ」の象徴として存在したのは、ウォールデン湖の実質的な清澄さによるものではなく、ソローのこうした寓意的な認識法によるものであったと言えるのではないだろうか。

ソローは、社会改革の思想においても、「ピュアであること」を基本的な原則とした。というのも、ソローにおいて、詩も宗教も社会思想も究極的には同一の原理に基づくものであり、その原理の異なる局面でしかなかったからである。エマソンは、エーデルワイスのイメージを用いてソローの特質を描こうとしたが、この記述は、ソローが“Slavery in Massachusetts”に記した睡蓮の花の描写を連想させるものだった。ソローは、このエッ

セイのなかで、逃亡奴隷法を認可したマサチューセッツ州政府の腐敗ぶりと「原則」のなさを痛烈に批判するが、その結末において、睡蓮の花の「純粋さ」に慰藉され、自然の過程に希望を見出した経緯を、つぎのように描いている。

But it chanced the other day that I secured a white water-lily, and a season I had waited for had arrived. It is the emblem of purity. It bursts up so pure and fair to the eye, and so sweet to the scent, as if to show us what purity and sweetness reside in, and can be extracted from the slime and muck of earth.... I shall not so soon despair of the world for it, notwithstanding slavery, and the cowardice and want of principle of Northern men. It suggests what kind of laws have prevailed longest and widest, and still prevail, and that the time may come when man's deeds may smell as sweet. Such is the odor which the plant emits.⁵⁾

「ピュアであること」への執拗なこだわりは、ソローにおける夜明けの讃歌や精神的な覚醒の問題、さらには物事の「原理」を追究するといった、ソローの文学の全般的な主題ともけっして無縁ではなかったように思われる。

2. ピュアという「思想」

ソローは、1852年9月26日の日記において、「純粋さ」の夢を見たと言っている。

Dreamed of purity last night. The thoughts seemed not to originate with me, but I was invested, my thought was tinged, by another's thought. It was not I that originated, but I that entertained the thought. (*J*, 5, 354)⁶⁾

この日記の一節において注目すべきことは、まず、ソローが「ピュアであること」を必ずしも詩的な感性としてではなく、ひとつの「思想」、あるいは哲学として考えていたことである。さらに、その「思想」がソロー独自の着想ではなく、他の者から譲り受け、共有されたものであったという事実であろう。この日記の記述は、当時のコンコードの知的風土において、「ピュアである」という哲学が咀嚼され、共有されていたことを示唆していた。

その知的・精神的風土の中核にいたのは、おそらく、エマソンであり、その周辺に集まった超絶主義者であった。超絶主義者と呼ばれた知識人のほとんどがユニテリアン派の牧師であり、「ピュアである」という思想も、おそらくは、きわめて宗教色の強いものであったことは容易に推察される。たとえば、超絶主義の先駆的な存在であり、その思想の拠りどころとなった William Ellery Channing は、“Likeness to God”という説教において、神を「光と力と清澄さの尽きざる泉」と讃えている。⁷⁾キリスト教の本質は、その「神聖な清澄さをもとめて、われわれが神の似姿」⁸⁾となるよう努力することであり、「心の清らかなる者のみが、清らかなる神を拝み、交感することができる」⁹⁾と提起したのである。

チャニングにおける「ピュアである」という思想は、エマソンにも受け継がれていた。チャニングが神を「光と力と清澄さの尽きざる泉」と喩えたように、エマソンもしばしば

光と水のイメージで神聖な存在を表現し、その「純粋さ」を強調した。¹⁰⁾ *Nature* の冒頭において、エマソンは神との「純粋な」交感を象徴的なイメージで描き出していた。

Standing on the bare ground,—my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space,—all mean egotism vanishes. I become a transparent eye-ball. I am nothing. I see all. The currents of the Universal Being circulates through me; I am part and particle of God.¹¹⁾

神との交感の瞬間において、自己は「透明化」し、「普遍者の流れ」のみが意識される。自己と神との間に介在するものはなにもない。この神聖な交感の「純粋さ」は、“The Over-Soul”において、つぎのように表現されている。

The soul gives itself, alone, original and pure, to the Lonely, Original and Pure, who, on that condition, gladly inhabits, leads and speaks through it.¹²⁾

エマソンの宗教的な思想において、「魂は純粋さを必要とし」(“The soul requires purity”)¹³⁾、「不純なものを脱ぎ捨てるものだけが、純粋さを身にまとう」(“He who puts off impurity, thereby puts on purity.”)¹⁴⁾ ことになるのである。エマソンが究極的な理想と考えたのは、「純粋に精神的な生」(“the purely spiritual life”)¹⁵⁾であった。

逆の見方をすれば、神と自己との間になにも介在するものがなく、自己が「無」と化して「普遍者の流れ」をありのままに受容することが、「純粋さ」の証しであったのだ。いわば、「普遍者の流れ」に対して自己が「受け皿」となり「さえぎるもののない水路」(“unobstructed channel”)¹⁶⁾ となることこそ必要であったのである。ソローが『ウォールデン』において、「人は純潔の水路が開いていれば、神へとただちに流れてゆくものなのである」と語った背景には、エマソンと共有された思想が存在したはずである。

ソローやエマソンの友人であった社会改革家 Amos Bronson Alcott も同様に、水のイメージをもちいて「純粋の観念とその象徴」(Idea and Emblem of Purity) という問題を考察していた。彼は、みずから創設したテンプル学校の子供たちとの「対話」において、「純粋の観念」を執拗に子供たちに問いかけていた。

George K. I think water was pure, and wine was purer, and it signified that they must purify their spirits.

Martha. The wine was purer than the water.

Augustine. Wine is not so pure as water—water represents truth.

Andrew. I think the wine was the Spirit of Jesus.

Welles. Water represents purity, but wine means more things, love, faith, &c.

Mr. Alcott. Did you ever hear the word Chastity? That word represents something more than purity, for it implies self-restraint. This story may represent deep love, as one of you said at the beginning of the Conversation, and when deep love is restrained by principles, it is chastity.¹⁷⁾

さらに、ブルック・ファームを創設した George Ripley は、この組織が「正義、純潔、愛という原則」(“the principles of justice, purity, and love”)¹⁸⁾に基づいて創設されたと明記し、この「知恵と純潔」¹⁹⁾という観点から人間社会を考える試みであったと記している。ソローが、ウォールデン湖をひとつの「象徴」とし、「ピュアである」ことをみずからの「原則」とし理想とした背景には、こうした超絶主義者たちの知的・宗教的な風土があった、と考えられるだろう。

3. ソローとピューリタン革命

「ピュアであること」をひとつの理想とした、コンコード周辺の知的・精神的風土を考察する際には、当然のことながら、ニュー・イングランド地方に歴史的に根ざした文化的連続性を問題とすることになるだろう。たしかに、「ピュアであること」を追求したソローの姿勢には、東洋思想の影響が窺えるかもしれない。先の『ウォールデン』からの引用においても、リグ・ヴェーダの教典にふれ、仏教的な解脱の思想が語られているし、ソローが肉食を「不浄」(W 143)として排斥したことも、東洋思想的な「純粋さ」と無縁ではなかったと思われる。また、エマソンの「透明な眼球」にしても、そのひとつの規範とされたのは、カントの「純粹理性」という概念であった。

しかし、こうした東洋思想やヨーロッパの哲学の影響もさることながら、注目すべきは、そうした思想を受容し咀嚼する精神的・宗教的風土がニューイングランド地方に歴史的に醸成されていたということである。よりの確にいうと、コンコードに集まった超絶主義者の多くが、ピューリタンの信仰に対して共感を寄せ、信仰を純化するという、その根本思想に深く共鳴していたという事実である。むろん、個人のうちに神性を認めようとした超絶主義の根本思想と、ピューリタンの厳格な教義とは対極的な立場に立つものである。にもかかわらず、神という概念を極限にまで純化し、みずからの信仰もそれに応じて純粋なものとするという意味において、ピューリタンとトランセンデンタリズムは共通するものがあったと言えるのではないだろうか。²⁰⁾

牧師の家系に生まれたエマソンが、厳格なカルヴィン主義者であった叔母 Mary Moody Emerson に大きな影響を受け、さらに、ピューリタニズムの伝統に対して深い敬意を抱いていたことは広く知られている。²¹⁾ 父方の祖父である Ezra Ripley の死に際して、エマソンは、ピューリタニズムの特質をつぎのように描いている。

He [Dr. Ezra Ripley] was identified himself with the forms at least of the old church of the New England Puritans..., so that he seemed one of the the rear-guard of this great camp and army which have filled the world with fame,... For these Puritans, however in our last days they have declined into ritualists, solemnized the heyday of their strength by the planting and the liberating of America. ²²⁾

エマソンは、ここで、ピューリタニズムにおける二つの相反する傾向を示していた。ひとつは、ピューリタンの宗教が、本来「アメリカを解放し」、人々に精神的な自由を与えるものであったこと。そして、もうひとつは、その自由を求めたはずの宗教が、最終的には「形

式主義」に墮してしまったということである。むしろ、エマソンの力点は、信仰を純化し、魂の解放を願ったピューリタニズムの精神あるいは思想の原点に置かれていた。個人の魂を社会的・宗教的な因習から解放し、聖書の教えに基づいて信仰を純化しようと試みたピューリタンは、革命家の集団あるいは「軍隊」であり、そうした革命思想の伝統は「ピューリタニズムの延長」(“the continuation of Puritanism”)²³⁾として現在もまた存在する、とエマソンは主張したのである。

ここでわれわれは、ソローが『ウォールデン』において英国の歴史にふれ、1649年のピューリタン革命のみが注目し値すると語ったことを思い起こす必要がある。²⁴⁾ ソローは、さらに“A Plea for Captain John Brown”において、社会革命家ブラウンをピューリタンの末裔として称賛した。このエッセイにおいて、ソローは、ブラウンが神聖な法則にもとづいて行動した「超絶主義者」であるとも述べており、²⁵⁾ 彼の思想において「ピューリタン」と「超絶主義者」が連想づけられていたことは興味深い事実であった。さらに興味深いことは、エマソンの指摘したピューリタンの二面性と、ソローがジョン・ブラウンに対する弁護のなかで指摘したピューリタンの二面性がきわめて類似していることだった。

He was one of that class of whom we hear a great deal, but, for the most part, see nothing at all—the Puritans. It would be in vain to kill him. He died lately in the time of Cromwell, but he reappeared here. Why should he not? Some of the Puritan stock are said to have come over and settled in New England. They were a class that did something else than celebrate their forefathers' day, and eat parched corn in remembrance of that time. They were neither Democrats nor Republicans, but men of simple habits, straightforward, prayerful; not thinking much of rulers who did not fear God, not making many compromises, nor seeking after available candidates.²⁶⁾

ここで対比されているのは、エマソンの記述と同様、ピューリタニズムの精神と形式であった。厳格なまでに固守されたピューリタンの因習とは裏腹に、その精神は、神の僕としていかなる世俗の権威をも否定し、妥協を許容するものではなかった。ルターによって導かれたピューリタニズムの思想において、人間は生来の権利が認められ、神との純粋な合一を妨げるいっさいの世俗の制度や慣習は否定された。²⁷⁾ ブラウン大尉の行為は、この神聖な法に従うための革命であり、その意味において、ブラウンはイギリスにおけるピューリタン革命の主導者クロムウェルの再来でもあったのである。

エマソンの友人でもある Thomas Carlyle が *Cromwell's Letters and Speeches* を著したのは 1845年だった。カーライルは、従来、反逆者あるいは独裁者という汚名をきせられたクロムウェルを再評価し、その行為と気質の偉大さを讃えている。ソローはウォールデン滞在中にこの著作をむさぼり読み、カーライルの意見に強く共鳴した。ソローは日記のなかで、クロムウェルの “sincere ruggedness of his character” (J, 2, 253) を称え、 “divine madness” (J, 2, 187-88) をともなう実践力を評価しようと試みている。プラトンが、詩的インスピレーションを「神聖なる狂気」と表現したことは周知のとおりであり、カーライルはクロムウェルの革命精神が衆目には「狂気」と映ろうとも、その起源が「神

聖」なものであり、純粹で詩的な原理に基づくものであることを指摘したのだった。そして、ソローは、カーライルがクロムウェルを「弁護」したのと同じ意味合いにおいて、ブラウン大尉の精神の気高さを称賛したのである。

ソローは、いわば、ニューイングランド地方におけるピューリタンの歴史や伝統以上に、その源流ともいえるルッターの宗教改革、そして英国におけるピューリタン革命、それを指揮したオリヴァー・クロムウェルの人格により深く興味を抱いていたと言えるだろう。いわば、ソローはピューリタニズムという宗教の教義や倫理に関心を抱いたのではなく、宗教的な教義や因習を改革し信仰を純化するという、ピューリタンの精神あるいは革命思想に共感したといえるのである。ソローは、1840年8月21日の日記において、すでにアメリカにおけるピューリタニズムの源流についての関心を、つぎのように記していた。

The age in which Sir Water Raleigh lived was indeed a stirring one. The discovery of America and the successful progress of the reformation afforded a field both for the intellectual and physical energies of his generation. Its fathers were Calvin—and Knox—and Cranmer, and Pizarro, and Garcilasso; and his immediate forefathers Luther and Raphael, and Bayard, and Angelo and Ariosto—and Copernicus—and Machiavel, and Erasmus—and Cabot, and Eimenes—and Columbus. (*J*, 1, 175)

カルヴィンはスイスにおいて、ノックスはスコットランド、克蘭マーはイギリスにおいて宗教改革を指導した人物であり、ソローの思想において「宗教改革の進展」と「アメリカの発見」は必然的に結びあわされていたのである。

4. 感覚と超越

エマソンはソローへの弔辞において、この年下の友人を「生まれつきのプロテスタント」、「極端なプロテスタント」であったと述懐し、²⁸⁾ さらに「真のアメリカ人」であったと称賛している。²⁹⁾ 当時の社会において、「真のアメリカ人」という言葉が使い古された演説の修辞であったとしても、³⁰⁾ その表現のなかに、プロテスタンティズムの精神を体現した、という意味合いを読み取ることは困難なことではないだろう。それは、勤勉さ、そして生活の簡素さや実直さといったピューリタンの倫理を示すばかりではなく、あらゆる形式と権威にとらわれず、精神の自由と純粹さを求めたソローの基本的な姿勢を表現するものではなかっただろうか。エマソンが、この弔辞において、ソローの性質を「気高い純粹さ」(“Noble Purity”)と結んだことも、そうした背景と無縁ではなかったはずである。

たしかに、ソローは同時代の思想家とともに、purityという思想を共有していた。その思想の源泉のひとつは、宗教を改革し「純化」しようとしたピューリタニズムの精神の中に見い出されたと言えるだろう。いまひとつ、われわれに残された問題は、ソローの理想とした purity がたんなる思想でしかなかったのか、ということである。ウォールデン湖は、ひとつの「象徴」、あるいはイデオとしてしか存在しえなかったのだろうか。

もちろん、この問いに答えることは、さほど難しいことではない。ウォールデン湖はあきらかに実在した。purityという思想と同様に、いやはるかそれ以上に、ウォールデンの水

や水の「清澄さ」そのものが価値あるものとして称賛されたのである。ソローにおいて、purity という観念は、ウォールデンの“pure water”や自然の音色の“pure melody” (J, 1, 58), あるいは野イチゴの純粹な味覚という、感覚的な体験から孤立して認識されるものではなかった。それは、こうした自然の「事実」が、purity というイデオの一时的な表象として、あるいはその詩的イメージとして機能していたという意味ではなく、身体的な感覚や経験そのものが価値を有し、その有機的なつながりにおいて、観念に「純化」され、あるいは「真実」に結晶するという意味合いだったのである。この点において、ソローの purity の考え方は、身体感覚を排斥し、“purely spiritual life”を理想と考えたエマソンの立場とは対照的であった。

We need pray for no higher heaven than the pure senses can furnish, a purely sensuous life. Our present senses are but the rudiments of what they are destined to become. We are comparatively deaf and dumb and blind, and without smell or taste or feeling.... Are we to be put off and amused in this life, as it were with a mere allegory? Is not Nature, rightly read, that of which she is commonly taken to be the symbol merely? ³¹⁾

エマソンは、“The Transcendentalist” というエッセイにおいて、アメリカにおける超絶主義思想がドイツ観念論の流れをくむものであり、「理性」と「悟性」を明確に区分する観点から、この思想の本質を語ろうとした。感覚的な経験を排した理性という概念の「純粹さ」は、エマソンにおいて、神との交感のうちに経験される世界の「透明さ」(transparency)へとすり替えられた。神(=イデオ)から放出される光(“the glimmering of that pure, plastic Idea.” (May 3, 1834, Whicher 17))を直感的に把握することが、エマソンにおいて求められた「純粹さ」であり、「透明さ」であったと言えるだろう。

いっぽう、ソローの思想において、エマソンにみられるような超越的な存在(神)に対する意識は希薄だった。いやそれどころか、自然が抽象化されて、観念(イデオ)のなかに封じ込められることに対して、強い違和感と反発を抱いていたのである。人間の意識が理性と悟性に分断され、感覚的な経験と観念との間に亀裂が生じて、自然が寓意化されることに、強い危惧を抱いていたのではないか。エマソンのうちに潜むこの寓意的亀裂を意識していたソローは、逆に、自然の個々の「事実」と感覚的な経験を直視し、その基盤のうえに立って、みずからの経験を限りなく「純化」し、そこに精神性を希求する可能性を見出したのではなかったろうか。ソローに言わせると、「一方的に精神的な法則もなく、また一方的に物理的な法則もない」(J, 2, 240)のであり、「実践する者のみが、詩的な生活の基盤を築いている」(J, 2, 241)と言えるのだった。こうした意味において、ソローの思想は、超絶哲学の流れをくむというよりも、自然哲学の系統をひくものであり、³²⁾エマソンとソローの思想を分かちキーワードのひとつもまた、purity という言葉ではなかっただろうか。

注

- 1) Ralph Waldo Emerson, "Thoreau," in *Selections from Ralph Waldo Emerson*, ed. Stephen E. Whicher (Boston: Houghton Mifflin, 1960) 395.
- 2) Henry David Thoreau, *Walden and Resistance to Civil Government*, 2nd Ed., ed. William Rossi (New York: Norton, 1992) 152. 以後, *Walden* についての言及は, この版に依るものとし, 本文中に *W* と略記し, ページ数を付す。
- 3) Ralph Waldo Emerson, "Circles," in *Emerson: Essays and Lectures* (New York: The Library of America, 1983) 403
- 4) ニーナ・ベイムは, エマソンとソローにおける水のイメージの意義について考察しているが, その中で「反映」(reflection) のモチーフがソローの作品に特徴的に用いられていると指摘している。Nina Baym, "From Metaphysics to Metaphor: The Image of Water in Emerson and Thoreau," *SiR* 5(1966): 231-43.
- 5) Henry David Thoreau, "Slavery in Massachussetts," in *Thoreau: Political Writings*, ed. Nancy L. Rosenblum (Cambridge: Cambridge UP, 1996) 135.
- 6) Henry David Thoreau, *The Writings of Henry D. Threau, Journal, Vol. 5: 1852-1853*, ed. Patrick O'Connell (Princeton: Princeton UP, 1997) 354. 以後, ソローの日記の引用については, プリンストン版に依るものとし, 本文中に *J* と略記し, 巻数とページ数を付す。
- 7) William Ellery Channing, "Likeness to God," in *Transcendentalism: A Reader*, ed. Joel Myerson (Oxford: Oxford UP, 2000) 12.
- 8) Channing 6.
- 9) Channing 4.
- 10) Baym 231-43.
- 11) Ralph Waldo Emerson, "Nature," in *Emerson: Essays and Lectures* 10.
- 12) Ralph Waldo Emerson, "The Over-Soul," in *Emerson: Essays and Lectures* 400.
- 13) Ralph Waldo Emerson, "The Over-Soul," in *Emerson: Essays and Lectures* 389.
- 14) Ralph Waldo Emerson, "Address," in *Emerson: Essays and Lectures* 76.
- 15) Ralph Waldo Emerson, "The Transcendentalist," in *Emerson: Essays and Lectures* 197.
- 16) Ralph Waldo Emerson, "Spiritual Laws," in *Emerson: Essays and Lectures* 306.
- 17) Amos Bronson Alcott, *Conversations with Children on Gospels*, in *Transcendentalism: A Reader*, Myerson 192.
- 18) "Brook Farm Association for Industry and Education," in *Transcendentalism: A Reader*, Myerson 466.
- 19) Myerson 466.
- 20) ピューリタニズムと超絶主義思想との関連性については, 以下のような文献を参照されたい。Perry Miller, "From Edwards to Emerson," in *Errand into the Wilderness* (Cambridge, MA: Harvard UP, 1956) 184-203; Frederick B. Tolles, "Emerson and Quakerism," in *On Emerson: The Best From American Literature*, eds. Edwin Cady

- & Louis J. Budd(Durhm: Duke UP, 1988) 19-42; Wesley T. Mott, “Emerson and Antinomianism: The Legacy of the Sermons,” in *On Emerson* 216-44.
- 21) エマソンは、1841年5月6日の日記において、メアリー・ムーディ・エマソンの思想にふれ、彼女が望んだことは、エマソンを含めた若い牧師たちが、カルヴィニズムの信仰を「純化」(“purify”)し、その精神を新たな時代に吹き込むことであった、と共感をこめて語っている。Whicher 3-4.
- 22) Whicher 186.
- 23) Whicher 186.
- 24) Henry David Thoreau, *Walden and Resistance to Civil Government* 69
- 25) Henry David Thoreau, “A Plea for Captain John Brown,” in *Thoreau: Political Writings* 140.
- 26) Rosenblum 139.
- 27) アメリカにおけるリベラリズム思想の展開については、Fred Gladstone Bratton, *The Legacy of the Liberal Spirit: Men and Movement in the Making of Modern Thought* (Boston: Beacon Press, 1943) 183-200; Thomas P. Neil, *The Rise and Decline of Liberalism* (Milwaukee: The Bruce Publishing, 1953) を参照した。
- 28) Ralph Waldo Emerson, “Thoreau,” Whicher 380.
- 29) Whicher 383.
- 30) たとえば、ソローはジョン・ブラウンに対する弁護のなかで、ブラウンを「真のアメリカ人」であったと、同様な賛辞を送っている。“A Plea for Captain John Brown,” Rosenblum 147.
- 31) Henry David Thoreau, *A Week on the Concord and the Merrimack Rivers*, in *Henry David Thoreau*, ed. Robert F. Sayre (New York: The Library of America, 1985) 310.
- 32) 超絶主義者とよばれた集団の一員であったフレデリック・H・ヘッジは、「コールリッジ論」においてシェリングの哲学にふれ、哲学の流れを超越哲学と自然哲学に二分して考えている。エマソンやソローがヘッジの著作に親しんでいたことは疑いの余地はなく、両者はみずからの思想の方向性と他方との差異について自覚的であったと考えられる。Frederick Henry Hedge, “Coleridge's Literay Career,” Myerson 92.